

図書館だより



11月号

2024年11月29日
安田小学校図書館

■文化教室「小学生と読書 一かたわらに本のある幸せー」

11月26日、保護者の方を対象に「小学生と読書」をテーマとした講演会を行いました。「本好きな子どもになってほしい」「どんな本を選んだらよいかわからない」といった悩みを解決するヒントを、小林いづみ先生(安田女子大学非常勤講師)が教えてくださいました。

小林先生は、読書の力をつけるためには、親が手をひくのではなく、子ども自身が「本は楽しい」「読みたい」と思うことが大切で、その気持ちが知識や言葉の吸収となり、学力や読解力につながっていくとおっしゃっていました。そして「本が楽しい」と感じるためには想像力が必要で、映像中心の昨今の社会の中では想像力が育ちにくいので、近い大人が物語を読み聞かせて想像力を育てることが大切だということでした。

わかりやすい実例や参考になる本の紹介もあり、講演後は紹介して下さった本を学校図書館で借りる時間や小林先生へ個人的に質問をする時間も持つことができました。

参加者されたみなさんはメモをとったり、うなずいたり熱心に聞かれていました。

いただいたアンケートの一部を掲載しています。



■とてもとても本が読みたくなりました。本の大切さを知っているがゆえに、子どもに強制してしまっていた自分に反省しました。これからは、思いっきり子どもと本を楽しみたいです。

■以前小林先生からお話を聞いたことがあり、今回改めてお話を聞いて、本の読み聞かせの大切さを感じました。子どもに本の楽しさが伝わるように親として働きかけられたらと思います。

■娘が小さいころ読み聞かせを頑張っていたにもかかわらず、小学生の高学年で本が嫌いになってしまいました。しかし、高校生になってとつぜん本に目覚めて、本が大好きになりました。娘はお母さんが昔、本を読んでくれたからだと言うってくれました。すごくうれしかったです。

読み聞かせにおすすめの物語

絵本ではなく、長めの物語を毎日少しずつ読み聞かせてみませんか？
物語が頭の中で動き出す楽しさは「読みたい気持ち」につながります。

『チム・ラビットのぼうけん』

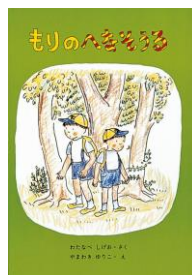
A・アトリー/作 石井桃子/訳 中川宗弥/画 童心社



やんちゃでいたずらっ子の子ウサギ、チムの毎日が書かれている短編集。以前もこの欄で紹介したことがある本です。大人が文字で読むと物足りなさを感じるかもしれませんが、1・2・3年生にとってはとても共感できるお話です。

『もりのへなそうる』

わたなべ しげお/作 やまわき ゆりこ/絵 福音館書店



森へ探検にでかけた兄弟が、見たこともないような大きな卵を見つけるお話です。このお話を聞く子どもは、頭の中でしっかりもののお兄ちゃん「てつくん」になったり、3歳の弟「みつやくん」の言い間違いにケラケラ笑ったりするうちに、自然とその世界に引き込まれていきます。

『ムギと王さま 本の小べや1』

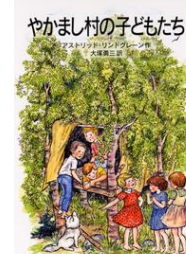
ファージョン/作 石井桃子/訳 岩波書店



現実ではない世界を持つことの喜びと、生きることのすばらしさにあふれた物語が詰め込まれた短編集。自宅の「本の小部屋」で、「古い本のなかの金のほこり」を吸って大きくなった作者の、物語世界への愛をつづつたまえがきは一読の価値があります。

『やかまし村の子どもたち』

リンドグリーン/作 大塚勇三/訳 岩波書店



一番たのしかった誕生日、毛布とサンドイッチを持ち込んで過ごす干し草小屋での一夜、しげみの中にある自分たちだけの小屋。やかまし村の子どもたち6人の自由でわくわくする毎日をえがいた物語。10分ほどで読みおわる章ばかりなので最初の読み聞かせにぴったりです。

『ドリトル先生アフリカゆき』

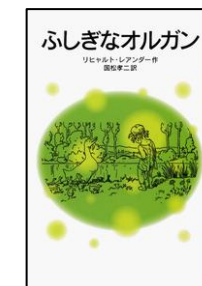
ロフティング/作 井伏鱒二/訳 岩波書店



動物の言葉がわかるドリトル先生の冒険物語。井伏鱒二版は戦前から出版され続けていますが、色褪せません。別の訳もたくさんありますので、読みくらべてみてはいかがでしょうか。イラストが多いものは一人読みでも手にとられやすいのですが、こちらは大人がおすすめとあげるとよいと思います。

『ふしぎなオルガン』

リヒャルト・レアンダー/作 国松孝二/訳 岩波書店



冷たい性格のために神様からひどいばつを受けた騎士と、その騎士を助けるために自分の全てをなげうつ優しい妻の話など、高学年が聞いても心にひびく話が多い童話集です。ドイツの外科医が従軍中に子どものために書き送った作品で、和訳の言葉の種類がとても豊かです。